

第10回（平成20年度第2回）ごみゼロプラン推進委員会

日時：平成20年10月10日（金）14：00～16：30

場所：JA健保会館 4階会議室

開会

開会あいさつ ー略ー

（広瀬委員長）

19年度のプランの進捗状況の点検・評価（案）がまとまったので、委員の皆さんのご意見をいただいて、作り上げたいと思います。

今日はお忙しいところ集まっていたいてありがとうございます。ちょうどこの時期は忙しい方が多いものですから、特にNPO等団体の方がほとんど全員欠席なんですが、あとでそれぞれの方に意見を伺いたいと思います。

それでは、今日の議事の一番のメインは「19年度プランの進捗状況の点検・評価（案）について」という資料1で、こちらの説明をまずしていただきたいと思います。特に皆さんのご意見は点検評価の最後の「評価」の文案のところを中心に、お願いしたいと思います。よろしくお願いします。

（事務局）

資料1「ごみゼロ社会実現プランの進捗状況の第3回点検・評価について（案）」説明

（広瀬委員長）

はい、ありがとうございます。たくさん内容でしたけれども、とりわけこの下線部の部分は、推進委員会の皆さんのご意見をお聞きして、それでまとめていくということになりますので、それ以外の部分も勿論ご指摘いただきたいと思いますが、どこからでも構いません。どうぞ自由にご意見を出していただきたいと思います。

（金谷委員）

まず、この中に20年度の調査結果とかいろいろ出てくるんですが、それらについて勿論詳しいことは書けないんですが、最低限のどこを対象にやって、どのくらいの数があって回収率がどれだけとか、そういうふうなものがどこかにまとまってあってもいい気がするんですが。それがないと、これだけを見た時に、一体どの程度の県民アンケートをどのようにやったのか、それが分からないですね。ですから、場所としては「参考資料」というのがありますが、そのどこかに、この中の調査というのはこういうふうなものなんだというようなことを一覧でまとめておいたらいいいと思うんですけど。それがあったほうが

いいかなというのが1点。

次の点は、同じような表示の問題のことから申し上げますと、19 ページあたりから以降、市町を対象にした取り組み状況のグラフがあるんですが、本当はもっと事業者と同じようにパーセントになっているほうが見やすいと思うんですが、これは直すのは大変でしょうから、せめて全市町が29ですから、それを書いておいたほうがいいです。これはエクセルで普通に作ると、上が30になったり35になったりしているので、分からないですよ。本当は29だから30はあり得ないわけで、本当はパーセントのほうがいいと思いますけど、そうするには手間がかかりそうなので。全部市町のグラフのところに「全市町 29」とか、そういうふうなものがあったほうがいいと思います。

それから、23 ページ以降の事業者のほうはパーセント表示になっているんですが、こちらについても、先ほど申し上げた調査の概要のところがあることを前提にしても、このグラフだけを見た時に、おそらくこれは事業者数ベースですね。例えば規模が全然違うと思うんですが、それは一応割り切って事業者数ベースなんだというようなものがあったほうがいいかなと思います。

あと、今度は内容なんですが、42 ページの生ごみのところなんですが、ここにもし必要であればということなんですが、ここの構成が、基本方向5の「生ごみの再資源化」の中で、5-1 (1) が家庭の生ごみで、5-1 (2) が事業系になっているわけですが、42 ページの「評価と課題」の最後のところに、例えば「なお、家庭系生ごみの再資源化との連携や協働の可能性や法的課題も検討していく」とか、そういうのがあってもいいかなと思うんです。

というのは、同じ地域のところ、今は勿論それぞれがやっているんですが、おそらく一緒にやったほうが効率的な場合もあると思うんですよ。あとは食品製造業のほうも含めて、いい堆肥を作るためにはブレンドしたらいい場合もあるとがあると思うんですよね。ただ、その場合に廃棄物処理法上の産廃、一般廃棄物、それから責任主体とか、いろんな問題があるんです。それを法的課題としたわけですが、そのへんも検討課題としたほうがいいのではないかなと。それぞれやっていく上で課題解決する上で、一緒にしたほうがいいんじゃないかというものが出てくるかも知れないし、もう全部一緒にしろという意味ではないんですが、そういう検討というふうなものも、表現を入れてもいいかなと思います。

それから、これは表現上のことではなくて質問なんですが、7 ページで「ごみゼロ社会実現プランの認知率」ということなんですが、まずこれについての質問で、質問の仕方と

しては、内容というところではなくて、このプランの名前を知っているかどうか、そういうふうな理解でよろしいわけですね。

(事務局)

はい。

(金谷委員)

これが4割半ばぐらいというのは、正直言って結構高いと思うんですよ。これを上げるのは大変だろうなという気はするんですね。

質問と申し上げた二つ目は、県の中にこういう「何とかプラン」というのは結構たくさんあると思うんです。そういうそれぞれのプランで、一体どれを知っていますかという横並びの調査みたいなものがあるのかどうか。もしあれば、どうですか、そういうものはないですか。

(事務局)

長期計画からいろいろなプランを各部で作っておりますので、それぞれにどれぐらい知っておられるかという個々の調査はあるかもしれませんが、体系的に県のプランを並べてどれを知っていますかというのは、やられていないと思います。

(金谷委員)

それぞれの別個のものでもいいですけど。

(広瀬委員長)

一番有名なのは『しあわせプラン』？それが高いんですかね？

(事務局)

『しあわせプラン』自体の認知度は取ってないですね。県政全体に対する、施策に対する意識調査というのは政策部でやっているんですが、「しあわせプランを知っていますか」というのは、はないと思います。

(金谷委員)

僕は多分これより低いんじゃないかと。でも、45%知っているというのは、目標の8割、9割からは低いんですが、結構高いなという意識を持っているんです。というのは、行政ができることというのは限られているわけで、だからこれをどう見るかというところは、県の中でそれぞれ今されているものの、そういうものも調べるのがもしできれば、横並び比較されてみてもいいかなと思うんですね。

それともう一つは、じゃあ上げるためにはどうしたらいいかということですが、やっぱ

り意識的に新聞とかテレビのニュースとか、そういうところでなるべく意識的に出していくのが結局一番じゃないのかなという気がします。大勢の人に言葉として知ってもらうためには、そこはかなり意識的に、そういう努力が必要なのかなという気はしますけど。以上です。

(広瀬委員長)

他にありますか。

(岩崎委員)

ちょっと関連で、19 ページの同じ「ごみ減量化等の取り組み状況」のグラフで言うと、トータル 29 市町で、一番下の「情報提供その他」というのが全部やられているんですね。この「その他」の内容はやっぱり書いておかないとまずいなと思ったんですよ。その他は全部やっていて、ごみ量とか資源化量を情報提供しているところは 20 しかない。そうすると、「その他」は全部やっているんだから、この「その他」というのは何なんだ？というのがすごく疑問に思って、見ていました。

それから、進捗状況の点検・評価なのだから、確かに過去を振り返って、それから今年前半を振り返ってという話を中心にはなるんでしょうけど、ごみを取り巻く状況というのはすごく目まぐるしく変わりますでしょ。その中で言うと、例えば減量の話も数値目標も、CO₂ の排出削減の話とかがトピックで出てきたら、やっぱりそれをどう今後、評価の中に盛り込んでいくかというのは課題だとか、そういう、点検・評価の中でこれから課題になる、これはどうしても取り組んでいかなければいけないというものも、やっぱりどこかに入れておく必要があるんだろうということ。

それから、例えば集団回収とかに対する助成金の話も、今は結構市場が成立しちゃっていますけど、そういう古紙相場とかペットボトルとかビン、缶の値段がいいということが回収率を上げている部分になるんじゃないのかと。そうすると、それが例えば下がった時はどうするのかというようなことも、もう少し触れておく必要があるんじゃないのかなと。

私自身も現場を見たわけではないけれども、テレビなどでよく紹介されるように、今、中国が飲み込んでいっているとよく言われますよね。結果として日本の国内で一生懸命リサイクルで集めているものが、今、中国へ行って、それで日本の中での静脈産業の仕組みがなくなっちゃっているんじゃないかというのもよく報道されますよね。ああいうものが確かにリサイクルをすることによって、私たちはそれを達成しているつもりになっているけれども、それが実は静脈が切れてしまっていることになっているのかも知れないという

ようなところは、これは各市町が振り返りの中ではなかなか書けない話なんじゃないかと思えます。

それをこういう県のレポートで、これは当然、項目としては上がっていないので、点検・評価ということにはならないのかも知れないけど、よく国の白書なんかにもあるじゃないですか、昨今の廃棄物行政を取り巻く課題みたいなものが一番最初にあって、地球温暖化対策、CO2 排出量とかりサイクルのルートや市場が国内で危うくなっているとか、そんな総論みたいなのが「はじめに」の前に現状認識みたいなのところであっても、私はこれは県が出すレポートとしては、項目の中には盛り込めないにしても、あってもいいのかなという気がするんですね。それを県民の皆さんの広く知らせることが一つの県の役割なのではないかなと思ったりするんです。事実関係で、一委員の立場で違っていたらご指摘いただきたいと思えます。

(馬場委員)

そのとおりです。確かに今減量化されているのは集団回収とか行政の直接売却ですね。それが確かにございます。ただ、この10月になってから市場価格も下がってきています。

(岩崎委員)

ガーンと下がっているんだよね。

(馬場委員)

そうです。もう昨日あたり9月の半値ですね。

(岩崎委員)

要するに市場性であるところでは資源になって、あるところでは無価値としてごみになって出てきてしまうというのが一番辛いところですね。そういう特性を持っているものをどうごみゼロ社会実現のために誘導していくのかというのが、多分一番難しいところでしょうね。

(馬場委員)

一番問題になってくるのが、高齢化の中で、分別するのに、「できない」という苦情、要望ですか、そういったものが結構あるんです。分解しないといけないので手を怪我するとか。分別するのに共同社会が必要だということぐらいを書いていただくかですね。隣人や地域での助け合いが必要になるとか。

(羽根委員)

それはすごく私も感じます。桑名市では、各自治会単位で収集もし、それからスーパー

の拠点回収等、どんなところでもいつでも出せるようにということで始まったんですね。だんだんと自治会は売り上げ分のお金をもらえますので、そういう視点でやっているところは必死になってやっているところもあるかと思いますが、きちんとしましょうという意識は定着してきたんですね。

ところが、見ていますと、どんどんと自治会回収量が少なくなってきました。ということは、あっちこっちへ出しに行く人がたくさんいるということだと思うんですね。これはいい傾向かなと思いきや、やはり弱者に対してそういう手当てがなかったら、これは全然自治体は止めましょうと、すっきりさせましょうというふうなことはできません。自治体も多分財政が大変だとは思いますが、それを結局ある部分市民が負担を負っているわけですので。

やっぱり車のない人とか、ご主人が全然ノータッチの人とか、あるいは単身赴任、あるいは一人暮らしの方、とにかく多いわけですよ。この人たちのためにどうしたらいいのか。将来、私たちも団地に住んでいますと、ずうっと65歳以上の夫婦の世帯がだんだん増えてきましたので、もっともっと年齢は上がってくるだろう。そういう時には、一人になり、いつまでも二人ではないので、あつという間にそういう時代が来るんじゃないかと思っているんですね。

昔のように子ども会で行う資源回収は子どもの労働体験とかに位置づけられていて、あの頃は資源じゃなかったんですよ。労働体験だったんです。みんなで力を合わせましょうというのが始まりなんですね。今までは自治会で、それこそ連携を取るという目的で自治会で、さっきもおっしゃったように地域で助け合うというそういう意識があったわけなんですけど、特に団地に住んでいますと、知らない人は知らないんですよ。ですので、またそういう形があったほうがいいのかと、今考えているところなんですね。やっぱり集団回収はゼロにはできないと思います。みんなで助け合わないといけない、そう思いますが。

(広瀬委員長)

他に。

(金谷委員)

今のことに対しては、おそらくいろんな手段を、多少効率が落ちてでも残しておいたほうがいいんじゃないかなと思います。そういう場へ持って行くのも、自治会が集めるのも、行政が集めるのも。行政のほうはなかなかそのコストの問題があるんですが、少なくとも今のシステムは、多少お金がかかっても残しておいたほうが、一旦崩れてしまうとかな

かもう一回やるのは大変なので。

あと、59 ページのところをお願いなんです、59 ページにごみゼロホームページへのアクセス数のグラフがありますよね。一つは、ごみゼロプランは17年の3月にできましたよね。ホームページはその直後からじゃないんですか。

(事務局)

プランの策定途中から立ち上げています。

(金谷委員)

アクセスカウンターはその頃はなかったんですか。

(事務局)

あります。

(金谷委員)

じゃ、最初からあったほうがいいな。最後はもう9月ぐらいまであったほうがいいかなというのが1点目です。それは可能ですよね。

このグラフを見るとなかなか興味深くて、18年度からずっと上がっているんですよね。上がって行って、それが徐々に下がって来ていると。下がっているけれども、19年度、ちょうど去年の今頃はピュンと上がっていますよね。やっぱりここについてはある程度の「こうだからこうなんじゃないか」みたいなものが書かれていたほうがいいんじゃないのかなと思うんですよ。こういうことをやったから上がったんじゃないかとか、そこは何か推測みたいなものはございますか。例えば小学校の総合学習があってみんなが見たとか。ずっと18年度は継続して上がっていますよね。

(事務局)

フォーラムを昨年の10月20日に開催しましたが、それに向けてかなり周知に力を入れましたので、それが一因としてはあるかなと思います。

(金谷委員)

そういうものを書かれたりしてやられておいたほうが、これからこういう広報には重要なのかなと。

(広瀬委員長)

ありがとうございます。他にございませんでしょうか。

それぞれ県・市町・事業者・NPO、多様な主体のそれぞれの取り組みと協働ということになっております。委員の皆様と係わりの深い部分ですが。

一番最後にかなり長い取りまとめ、「おわりに」というところがありますが、ちょうど短期目標が平成22年度ということで、単年度の点検・評価とともに、次の最終的な短期目標の目標達成までのところも含めて書いてあります。事業系ごみの排出削減はもうすでに目標をクリアしていますので、これで見直しというふうにしてあるんですが、家庭系のほうは目標に届きそうにない、もう一踏ん張りしないといけない、そのへん、いかがですか。淡々と書かれていて、このままで本当に目標達成できるんだろうかというふうに思ってしまうんですが。

実際よく読めば、有料化の問題、生ごみの問題、ちょうど今、全県的な状態でレジ袋削減がありますので、そういうところに力を注いで短期目標を達成していきましょうというのが、評価とこれからの方向ということになるんだと思いますが。

先ほど何人かの方からのご意見の中で、これから高齢化社会になっていくから、そういうことについて長期目標を見据えていく中では、当然そういうことも問題になってきますね。今年度は『ゼロ吉』君を中心に認知率を高めるということを含めて、とりわけ関心の少ない若年層のところにはお子さんを通じて周知を図ろうということで、高齢者については、今後の問題とは思いますが、できるだけ早めに習慣化していただいて、私自身も無意識に行動できるようになっておきたいと思っていますが、そういう点で、早く分別とか減量とかの習慣を身に付けていかないといけないと思います。

(高屋副委員長)

34ページの基本方向3「リユース(再使用)の推進」の「評価と課題」のところで、「エコイベントマニュアルの普及・啓発に努めるとともに、民間のイベントも含めた全県的な取り組みへとつなげる必要があります」とあります。今すぐいろいろな行事が多くて、確かにこういうイベントが多いんですが、全県的な取り組みへとつなげる必要があるというのは、何か考えていることがあるんですか。

(事務局)

エコイベントマニュアルについては、今、県のイベントでも実施しきれていないところがございますので、まずは県のイベント運営の中で徹底していきたくと思っています。そうでないと、なかなか他の方々へ「ごみゼロの考え方を踏まえてやってください」と言えないということがございます。

また、今現在、『ゼロ吉』の看板を手作りで作っておりまして、使いたいところにはご希望があれば使っていただきたいということで周知をしております。間伐材を使っておりま

して、今日も貸し出しています。もしお使いになりたいというようなイベントがございましたら、ご連絡いただければと思います。

(高屋副委員長)

それこそ各市町に一つずつでも渡して、「イベントごとに持って行って」という感じで。

(事務局)

これは当初、私ら職員の手作りで作らせていただきまして、みんなで間伐材とかそういうものを使って作りまして、これぐらいの大きさなので、風に倒れないような工夫とかいろいろしまして、今までも多分貸し出し回数は20件を超えておると思います。各地域事務所のイベントであるとか各市町さんで行われるイベントで、ご利用のご要請がこちらへあれば貸し出しをさせていただいておるような状況です。

(金谷委員)

今の34ページの「エコイベントマニュアル」のところなんですが、「評価と課題」の表現で、エコイベントマニュアルは県が主催・共催のものが前提ですよ。それはやっぱりそうであったほうがいいですよ。「県主催・共催のものについてはエコイベントマニュアルに基づいて」と書かれて、あとは波線の部分なんですが、エコイベントマニュアルは環境森林部でしたか、生活部のほうでしたか…。

(事務局)

生活・文化部の所管になります。

(金谷委員)

部署が違うんですね。そうすると書きにくいとは思いますが、表現はこのままで結構ですが、県庁の中での検討ということでお願いですが、民間イベント全般についてはこうしろと言えないだろうと思うんですが、県の施設を使われる時に条件として、エコイベントマニュアルの簡易版みたいなものを作られて、こういうふうなものをやってくださいとか、そういうふうなことを検討されてもいいんじゃないかなと思うんですよ。

三重県のエコイベントマニュアルは以前詳しく見せていただいたことがあるんですが、非常に立派なものだと思うんですね。あと報告にしても。あれと同じものをおそらくすべての民間イベントに要求するのは多分難しいとは思いますが、ただ、簡単なものを、少なくとも県の施設を使うのであれば、こういうことはやって欲しいというふうなことを、簡単に1枚ぐらいでもいいと思うんですね。そういうふうなものを付けて、県の申請書と言うか、そこへ付ける形のものを検討されてもいいかなと。多分それが民間のほうに普及

していくのに一番早道じゃないかなという気がします。まったく県の施設を使わないものに対しては言えないと思いますが、これはやっぱりやりようがあるのかなと思います。

だから、県の施設を使う、あるいは県が主催・共催といった中で広げていくという意味で言うと、施設を使う時の許可要件にするという検討をしていただいてもいいんじゃないかなと思います。

(広瀬委員長)

ありがとうございます。他に。

(広瀬委員長)

先ほど金谷委員から指摘のあった表のほうに、特に事業者の取り組みとNPOの取り組みデータをパッと見ると、前年度より落ちているというふうに見えますよね。それについて何も書いておられないんですが、何か理由があるのかと。実施の段階の取り組みが増えてきて、計画とかそういうものが減ってきたということだったら、それはそれで納得できますし。

それから先ほどの金谷先生の話で、サンプリングの時に、ある程度デコボコがあっても差があっても、違いがあっても基本的にはそれぐらいの差は、あまり違いがないと見たほうがいいのか、そのへんがちょっと気になるところです。

(事務局)

こちらは、NPO等団体の選定が、もともとNPOの定款の中で「環境保全」を掲げておるところを対象にさせていただいておると、もう一つは交流会等のイベントにご参加させていただいておる団体等ということでありまして。今後の課題と言うか、NPO等団体の部分をどういった形でターゲットにしていくかということも一つ、ちょっと思案するところもあるんですが。基本的には、こういったNPO等団体については「環境保全」を定款に定められているところを対象にしているということです。

(広瀬委員長)

一番最初にごみゼロプランを作った時に、事業者、NPO、それから市町、県、それぞれの取り組みでごみ減量により効果的なものというウエイト付けがありましたよね。そうすると、一列に並べてしまうと何となく平板になってしまうんだけど、実際に事業者、NPO、それぞれのところでどういう取り組みが具体的にごみ減量効果として高いと考えていて実際に高いのか、その部分について中心的に点検・評価をして、もし足らなければ次の時にどうしていくかという形でないと、県民の方がこれを見た時に、一列にずっと並ん

でいると、何となく理解しにくいということがあります。ですので、今回でなくても、少しずつそのへんは工夫されたほうがいいかも知れませんね。

(広瀬委員長)

いかがですか。ほかに何かありませんでしょうか。よろしいでしょうか。

(岩崎委員)

すごく興味があるところとして、14、15 ページなんですけど、家庭系ごみの抑制ということから言って、ごみ有料化というのは絶対あるべきだろうと思うんですが、一つは、せっかく桑名の話も出ていますので聞いておきたいと思うのは、左側の14ページの表で言うと、桑名の袋は35リットルと45リットルしかないんですね。先ほどのお話で言うと、これから高齢化が進んでいって世帯が小さくなっていくと、出てくるごみの量も少なくなりますよね。そういうような時に、名張はやっぱ5リットルからありますでしょ。こういうのが排出抑制にどう影響しているのかというのは、これ、検討はしておく必要があるんだろうと思うんですね。小さいごみ袋を安く、大きいごみ袋を高くすることで、小さいごみ袋のほうがお得だねというふうに誘導する、そういうやり方というのが多分普通なんだろうと思うけど、名張のほうでも大きな袋のほうがお得になっている。5リットルで6円でしょ。だからそれは45リットルまでの袋はもっと高くしないとまずい。そんなことをちょっと思ったりしたんですね。

(羽根委員)

それはNPOでも市民会議でも再三言っているんです。やっぱやった人に対してお徳感がないと張り合いがないとか、あるいはせっかく生ごみとか、ごみを減らしているのに、ずっと袋がいっぱいになるまで待っていなきゃいけない。私らもそうなんです。ギュッギュッ詰めて、45リットル袋でも満杯にしたいと思っています。

本当に声を上げているんですが、行政が動かないんです。もう何年間か言っていますよ。

(岩崎委員)

これはこの程度の有料化だからいいけど、本当に有料ごみ袋で頑張って排出抑制に本格的に取り組もうと思ったら、やっぱり1枚の値段の設定と、それからもっと小さいごみ袋を作らないといけないよというような話を、例えばこれ、桑名と名張を比較してどうなんだろうというのを考えるべきだと思います。

(羽根委員)

日野市さんもやっています、あそこの現物の袋を持って、ちゃんと掛け合ってやった

んですが、「コストがかかる」ということで一蹴されました。

(岩崎委員)

それは確かに3種類、4種類、5種類作っているとコストはかかりますね。

(羽根委員)

この2種類でも、本当に大と中ぐらいなんですよ。小はなくて。中は損だから大にしましょうと、ほとんど大が出るんですね。中を置いているスーパーさんが少ないぐらいで。

(岩崎委員)

そうすると、小は作るべきであろうとあっていて、それでそれにロゴを入れたり、それから提供のCMを入れるという形で、結構製作費用は回収できるんですよ。それは他のところで手提げの部分を作っておいたほうがいいんじゃないかとか、そういうのをある検討会でやったことがあって、その時にやっぱりサイズというのはすごく影響するなって思っただけ。そうすると、それを例えば桑名と名張で比較してみるとどうなるんだというようなことをやってみるのは県の役割じゃないかなと思うのが一つ。

それから、15 ページのところ、「有料化実施時」と「現在」がありますよね。それで実施前と実施後ですべからず旧桑名は別として排出量は減っているんですね。その時に、有料化実施時に例えば合併前の志摩とか阿児は100円だったのが、今は50円なんですよ。こういうふうにも単価は減っても減量されているというふうにも読んでいいんですか。

(事務局)

そうではないです。これはその当時の実施前と実施後の1年間ですので、補足しますと、もう今はごみの量はほぼ元の量に戻っている状況ということです。

(三橋代理)

実際、これはその当時の、私は旧阿児の出身なんですけど、100円で有料化して、その当時は本当に100円というのはすごい金額で、極端に減りました。ただ、一時増えた不法投棄も減ってくる中で、極端に可燃ごみは減りましたし、効果はだいぶありました。なおかつ、この100円の料金についても、各自治会さんに助成金という形で返して、例えば集積所の清掃であったり、分別も含めてご協力いただいたということもあってかなり減ったんです。

ところが、合併によって100円が4年前に半分の50円になってしまいましたので、特にそういった習慣づけは出来ていたと思うんですが、やはり市全体としては人口は減っているんですが、特に阿児については周辺地域も含めて人口はほぼ横這いもしくは微増ですが、

金額変更を機に、ルール徹底も続かないというところがあって、徐々に、徐々に増えてきています。

(事務局)

これは第1回の時の点検・評価の時にグラフを示させていただいておまして、旧阿児町さんにつきましては、30数%、対前年で有料化実施後に減っております。これは非常に大きな効果ということですね。当時、平成5年の時ですので、その時に100円というのは全国的にも非常に高いんじゃないかと。

そこから特筆することが、10年間ほぼ一定の効果を維持されているということもあります。非常に単価が高いという設定の中で、各住民の方が減量化の意識を持たれて、10年間ほぼ維持されているんですが、やはりこの平成16年の時の合併を一つの契機として、合併した時に高い単価の設定のところと低い単価の料金設定のところがありましたので、中間的なところに合わされました。

合わされたところ、やはりそこからの数値が変わってきたということで、非常に経済的な動機付けとごみの量が連動しているということはここで分かるのかなど。過去10年間のデータを見ても、それが実証できるかなということがございます。

(広瀬委員長)

ごみの有料化は重点的な取り組みの一つなんですが、実際のところ、有料化によってどれくらい減って、実際、組成の中の何が減ったかとか、そのへんまでの十分な追跡調査をやっていないんですね。だから、それこそモデル事業じゃないですが、少し有料化の取り組みの中のどういうことによって何が減っているのか、どれくらい効果があるのか、そのへんはこれから有料化したり値上げをしたりする時の県内市町の参考になると思いますので、ぜひそういう取り組みをされたらどうでしょうね。

実際に68円だったのはどこでした？名張ですね。普通は、ごみの有料化というのは分別の仕方を変えることで、可燃・不燃ごみから資源に流す、名張の場合、2割近く減ったんですね。減ってよかったんですけど、何で減ったのが分からないまま、「よかった、よかった」では、次に進んでいく時にどういうふうに減っていくんだということが分からないですから、ぜひそのあたり調べられてはどうかと思います。

(馬場委員)

確かに減っているんですけど、結局、収集方法が変わっています。

(広瀬委員長)

個々人の出し方で減ったわけじゃないんですね。

(馬場委員)

そうです。個人の人の出し方じゃなくて収集方法が変わっていますから。

(事務局)

桔梗が丘の団地については、当初からあそこは戸別収集という形のもので、それを名張市さんがステーション化をされるという話を聞いています。

(金谷委員)

今年、滋賀のほうでもやったんですよ。その時にやっぱり一番の論点は値段じゃなかったです。まさに今のところなんです。結局、勿論値段もあるんですけど、やっぱり受け皿として資源化のほうに誘導しなければいけないということで、そうすると基本的には容器包装のほうに、資源ごみを無料にすると。それが結局、委員会の中で最後まで真っ二つに割れたんです。じゃあ、きっちりそれも監視しよう。それもダメだとなったんですが、そこは結構論点だと思いますよ。

実際にやろうとした時に、資源ごみのほうは無料にするのか、無料にしてきちんと誘導策を取るのか、それとも同じ値段にしてしまうのか、あるいは半分ぐらいで行くのかというところは大きな論点なので、ここはさっきおっしゃったように、これからを実際に考える時に制度設計で、値段は勿論だし、対象ごみ、あとはこの袋ですね。あと、そういう資源ごみのほうとの格差、そのへんの話が非常に大きいと思います。

だから、それがおっしゃるように基礎データももっと集めたらいいと思いますよ。例えばこの袋なんかも、それぞれの売れた枚数はきちんと行政がカウントしていますよね。できますよね。それも大事な情報だと思います。つまり、小さい袋のほうにどのくらいシフトしているのかというのが分かっただらすごく参考になりますよね。なかなか細かな世帯別というのは難しいでしょうけれども、そのへんの情報をやっぱり集めたほうがいいかなと。

(羽根委員)

桑名市の場合は、可燃袋はブルーなんですね。プラスチックのほうは透明なんです。透明のほうでも15円、同じ大きさを15円なんです。例えばこういうふうに分けましょと、容器包装の開始で、バケツとか、そういうのは前は入れられていたんですが、全部分けるようになりました。入っていると回収していかないんです。いつまでも集積所に置いてあるんです。そういう回収の時にチェックをされているということがはっきり分かるので、知らなかった人は勿論出してしまうんですが、その時に初めて学習するみたいで、そうい

う形を取ってだんだんと上手になっていくのかなと思っているんですけど。

(広瀬委員長)

そのあとはどうされるんですか。

(羽根委員)

そのあとは自己責任でいつの間にか、「あっ、私のだわ」という方がみえますのでね。私は時間を間違っ、夕方まであったんですね。回収車が行ってしまったあとに出したみたいで。その時は、「これ、かわいそうに、あとから出したのね」と思ったら自分のごみだったんですよ。そういう時は、よく見れば自分のごみは分かりますから、それで引っ込めましたけど。そういう感じで自然となくなっています。それにダメな場合はメッセージが貼ってありますね。それで自分でまた入れ直すという形になっているみたいです。

(立田委員)

13 ページのところ、先ほど岩崎先生もおっしゃいましたが、私、可燃ごみを減らすと言ったら、分別したら、あとは生ごみしかないんですね。それを堆肥化しているんですが、ここの表を見たら、一つの市でも1,000世帯もいないですよ。こういうことを進めていこうとした場合に、これをやるのはNPOの団体か、あとは全部行政がかんでいるんですよ。行政がかまない限り、こういうシステムは進まないような気がします。今後、県としてはこれをもうちょっと何か方策はあるんでしょうか。

私、個人的にはレジ袋を削減したからごみが減るとは思っていないんですね。やっぱり生ごみの再資源化、こういうことをしない限り、なかなか減らないのではないかと考えているんですが、しようとした場合に、一般個人は自分が堆肥化して野菜とかお花とかを作っていない限り、この堆肥化には向かないんですよ。先ほど金谷先生が言われたように、事業系でやっているのと家庭系のも合わせて、堆肥化してやっていったら、そこが何かうまくドッキングできたら、こういうことももっと進めることができるのではないかと思うんですが、そのへんは今後の課題でしょうかね。

私たちは、行政にいくら言っても取り組んでくれなくて、民間企業と組んだんですが、民間企業が最初にそういうふうに関心してくれれば、やっぱり次の展開につながるわけで、結局3年で終わってしまったんですが、その後の担当の方は「次は生ごみですね」と。

「エーッ、担当者が変わったらまた今頃言ってるの？」という感じだったんですね。

(事務局)

ご意見をいただいたので、今現在の考え方として簡単に全体についてお答えさせていた

だきたいと思います。

金谷先生から最初にいただきましたグラフの改良につきましては対応させていただきたいと思っております。

金谷先生が最初におっしゃった家庭系と事業系の生ごみの堆肥化の話、今の立田委員のお話とも絡むと思いますが、現状としましては、やはり家庭系はまさにご家庭でまず排出抑制・減量の努力をしていただく必要があるという中で、事業系はある程度出てくるものが一定なところがございますので、ちょっと別個に考えがちなところはございますが、ご意見をいただいておりますので、一緒に考えられないかということは検討させていただきたいと思います。

また、今、伊勢市で家庭からの生ごみも分別をしていただいて、事業系の生ごみも全部集めまして、堆肥化ではなくてガス化する、エネルギーに変えるといったようなことも検討されております。そういった流れも踏まえて、県としても新しい動きを情報収集しながら考えさせていただきたいと思っております。

それから、認知率比較につきましては、他の部署も、そもそも「この計画を知っていますか？」というのは調査しているのは少ないかと思いますが、もしあれば検討したいと思います。

それから、岩崎先生からご指摘いただいた、19ページの市町の数のところ、29市町すべてやっている「その他の情報提供」ですが、8-4(2)のところにも「情報提供」と書いてありまして、「ごみ量とか資源化量の情報提供をしていますか？」という質問の流れの中で、「その他のことについて情報提供していますか？」という質問で、おそらく分別の方法などについてやっておられるので、それで「イエス」という回答となっていると思うんです。具体的に何をやっているかというのは項目を把握していない部分がございますので、そこは申し訳ございません。

(岩崎委員)

ちょっと「その他」ということだけが全部やっているというのがすごく不自然に見えるということだけです。

(事務局)

それから、大きく地球温暖化の話なども入れたほうがいいのではないかとのご指摘でございますが、我々としても、レジ袋の有料化、レジ袋の削減というのは、まずごみの面では皆さんの意識を変えていただくという問題がございますが、それとともに地球温暖化

対策にも役立つというような話もさせていただいておりますので、そういったようなことも記述させていただくこともいいのかなと思っております。

それから、資源の値段の話ですが、おっしゃられるように、資源の値段というのは、資源化に回るものに非常に大きな影響をすることと思っております。ただ、その中でも市町さんからいただいているデータで県としても分析しきれいていないのは、18ページを見ていただきますと、集団回収量についてはそれほど増えていないという中で、全体が減っている。市町さんにお伺いすると、やはり住民でそのまま直接資源化に回っていくことが多いのではないかというお話を伺うんですが、そこはなかなか詳しく分析できていないところがございます。市町さんも細かく把握しておられないところですので、この点については問題意識として持たせていただきたいと思っております。

それから、高齢者のお話と自治会等との分別収集のお話もいただきましたが、自治会での分別収集を進めるということで、伊勢でのモデル事業などもそういった趣旨でステーションを整備して、そこを自治会で管理をしていただく。そこから出てくる収益は自治会の収入になるというようなこともさせていただいて、実際、成果も上げておるかなと思っておりますが、市町さんのほうからは、分別がなかなかできない高齢者の方などの支援策について、困っておられるという話は伺っております。モデル事業として実施したいというような話も以前あったんですが、実際にはそこには至らなかったんですが、各市町さんでも、いわゆる分別するのがなかなか難しい方についての支援をどうするかという問題意識を持っておられますので、今後はモデル事業として取り上げられるようなところがあれば、検討させていただきたいなというふうに思っております。

それから、最後は有料化の話でいろいろお話をいただいた分につきましては、我々としても「なぜ減ったのか」というのを出来るだけ掘みたいと思っておりますので、来年度もしくは再来年度、組成分析等もやりたいと思っておりますので、その際にいただいた問題意識について回答が得られるような形で調査をできるように、ご相談させていただきたいと思っております。

その他いろいろあろうかと思いますが、できる限り対応させていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

(広瀬委員長)

まだ議題がありまして、ほかにまた何か気付いたことがありましたら、事務局の方へご

意見を17日までに出示していただきたいと思います。

それでは、今まとめていただいたように、皆様のご意見を踏まえた上で案を直して、それで作成していただくということでよろしいでしょうか。

－「異議なし」－

(広瀬委員長)

では、そういうことで、この議題はこれで終わらせていただきます。

次に、「20年度版ごみゼロレポート(案)」について、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

資料2「平成20年度版 ごみゼロレポート(未定稿)」説明

(広瀬委員長)

ありがとうございました。楽しい企画になっていますが、何かご意見等ありますでしょうか。

(高屋副委員長)

この15、16ページですが、かなりこの場所だけ変わっているというか、何となく違和感がある。これ、もう少し柔らかく何かできません？県民さんが見て、「うちの市町もやっているかな？」というふうな感じで、見てもらいやすいような書き方を。

(立田委員)

これは点線のところは比較的分かりやすいですね。前に言わせていただいたので。それ以外の部分もまたちょっと分かりやすくしてもらえたらと思いますが。

(広瀬委員長)

だからそういう感覚で、ちょっと女性委員のみなさんから意見をいただけませんか。

(高屋副委員長)

この部分だけ確かに硬いです。「こうしたら？」というのをお願いします。じゃあ、すみませんが、その点をご相談していただいて。

(広瀬委員長)

このチャートのところは、周りに数字があるからかえって分かりにくいというのはあるんですかね。

(事務局)

模式的に真ん中のチャートが意図しているところで、あとの数字は個々の部分ですので、ここは抜けても別段問題はないと思います。グラフだけなら見ていただいて、「なるほど」と思っていたらいいと思います。

(広瀬委員長)

そのへんもすみませんが、よろしくお願いします。

それでは、あとは報告事項なんですが、まず「20年度のプランの推進の取り組み」のところで、これは順番に資料3、4、5と説明をお願いできますか。

(事務局)

資料3「H20年度のモデル事業」説明

(広瀬委員長)

資料3について何かご意見ございますか。

(金谷委員)

いわゆるスーパーの系列なんですけど、このレジ袋の有料化の対象にあれば、一つのスーパーの中の範囲なんですけど、だいたい1階が食料品とかですよ。2階、3階のほうはどっちかと言うと大きなものになりますね。ホームセンターと競合するような。その全部が対象なのか、1階の部分だけと考えるとどうですか。

(事務局)

基本的には食料品売り場だけということになっております。

(金谷委員)

やっぱりもうちょっと物が大きいような部分については対象外ということなので、スーパーと言っても、そういう1階部分という考え方でいいわけですね。

(金谷委員)

有料化の検討事業でそのあたりは検討されるんですかね。今のところはスーパーの生鮮食料品を対象にするとか。

(事務局)

今のところはスーパーの食料品部分ということになっておりますけれども、そこは業態としては広げていきたいということと、範囲も広がることであれば、また今後検討させていただきたいと思います。

(広瀬委員長)

ものすごく広がって、ほとんどの市町でやりかけているんですけど、ぜひ三重県のごみ

ゼロプランと『ゼロ吉』をセットに売り込んでいくようにしていただくと思いますので、よろしくをお願いします。

この点については西村委員から何か伺えますでしょうか。

(西村委員)

うちも伊勢市から始めまして、名古屋にも店がありまして、それが10月から始まりました。実は今日午前中ちょっと実績をずっと調べてみたんですが、そうしたら現時点でレジ袋無料配布中止の店のレジ袋辞退率が、当初80%ぐらいを予想していたんですが、実際は85%あります。現時点で一番高い市町は伊勢市で91%ぐらい、次いで名張市が90%、逆に今思ったより低いのが鈴鹿市、亀山市ですね。

当社の場合、24時間営業店舗というのがありまして、深夜にお買い物に来る方はほとんどマイバッグ等を持って来ていないんですね。ですから、そういうお店に関してはやはり普通の24時閉店とか22時閉店の店に比べると低いという傾向になっています。

それとあとは11月に有料化される松阪市、それからあと来年の4月1日から名古屋市、市内すべての区でレジ袋有料化という形になります。

ただ、三重県で四日市市さんだけが全然動いていないのがなぜかという気がするんです。そのへんはどうですかね。

(事務局)

そこは、県としては働きかけをさせていただいているんですが、今の段階では四日市市さんには動いていただけないという状況になっております。

(広瀬委員長)

こういうふうにごこの四日市市だけ真っ白なので。

(事務局)

この資料等により、意識づけと言うか、検討してくださいということはお願いはしています。

(岩崎委員)

袋の中の袋でレジ袋は使うでしょうね。小さくレジ袋に入れて、それを指定袋の中に入れてしまうと。

指定袋は大きいですから、その中にレジ袋で小分けしたごみ袋を入れるというパターンだと思います。

それと、私自身が四日市に住んでいるのですが、一つは、焼却工場の建て替えの話がず

っと遅れていることがありますので、そこでどういうふうにやっていくかという検討はやっていますので、例えば東京の23区が全部焼いちゃう方向に行っちゃったように、多分焼却のほうも考えているのではないかと。

そうなると、レジ袋の話できっちりと分別してもらっても、ひょっとするとその甲斐がなくなってしまうというようなこともあるんですね。何でも焼いちゃってサーマルリサイクルだけしようかという話になった場合にはそういうことも考えられるのかなと思って。少なくとも焼却工場はもうすぐ建て替えの時期ですので。そういうことはあるんです。

(事務局)

四日市市の中で、「ごみ捨てにも使えるので」という意見も多いのでというようなお話もされるんですが、今度、松阪市が11月に有料化になりますと、松阪はもともと指定袋が導入されていない中でレジ袋の有料化ができるということになりますので、そういった実績も踏まえ、四日市市にもまたお話をさせていただきたいと思います。

(金谷委員)

一つだけいいですか。私個人、家の購買行動で考えてみた時に、毎週週末土曜日に結構1週間分のいろんな物を買に行くんですよ。その時に結構たくさんいろんなものを買うんです。そういう時にバッグ1個ぐらいでは足りないわけです。

そういう行動パターンのところも結構あると思うんですが、そういうところは皆さんはマイバッグをたくさん四つも五つも持って買いに来られているのか、それとも85%の人というのは2、3日に1回ずつ細かに買いに来る人がほとんどで、残りの15%というのは私みたいに週末にまとめて買いに来るのか、そこには大きな差があるのか、どっちなんでしょうね。

(西村委員)

当社の場合、やっぱり普通のスーパーマーケットですから、どちらかと言うとお一人当たり比較的低い単価ですよ。お買い上げ点数とか。そのへんは大きな店と比べたら非常に低いですから、だいたい多くても2袋ぐらい。それとあと、週末に大量に買われるお客様とか業者の方ですね。この方に関しては段ボール等を用意してまして、それをお配りしております。

(金谷委員)

あと、その盗難のことをすごく言う店もあるんですが、そちらのほうについては今どう

なんですか。

(西村委員)

うちはマイバッグとマイバスケットというのがあるんですね。これは基本的にはそれでレジを通して、お買い上げされた方に帯状の紙を貼るんですが、それで 100%完璧かと言ったら、そうではないですね。やはり危険性があります。それは別にマイバッグだろうが、普通のレジ袋だろうが、それは同じだと思いますので。

(広瀬委員長)

ありがとうございます。他に何か。

よろしいですか。

では、20 年度のモデル事業は終わらせていただくということで、次に資料 4 の説明をお願いします。

(事務局)

資料 4 「H20 年度地域ごみゼロ推進交流会、セミナー等の開催概要」説明

(広瀬委員長)

何かございますか。

(羽根委員)

この堆肥化講座ですが、県民であれば誰でも参加できるんですか？地域は全然関係なく。

(事務局)

これは基本的に各市町単位でやっていますので、お近いところであれば可能かと思いますが、今どこかそういうふうなことがありますか？

(羽根委員)

ちょっと興味のある人がいるので、もう一次は終わったんですが、二次のほうだけでも参加できたらと思いましたので。参加したい時は申し込みをすればいいんですか。

(事務局)

ご紹介いただければ、担当受付が市町の役場になっておりますので、直接市町のほうにご案内させていただきます。

(広瀬委員長)

それでは、DVDのほうを見せていただきましょうか。

—DVD上映—

(広瀬委員長)

よくできています。

(高屋副委員長)

これは全部の小学校へ渡すんですか。

(事務局)

DVDとビデオにつきましては、県内の各市町の教育委員会事務局に1本ずつお送りしており、貸し出し方式を取っています。

(広瀬委員長)

コピーしたらいけないの？

(事務局)

コピーしていただくのはかまいません。

(事務局)

パンフレットをお配りしていますが、こちらはDVDに沿った形で作らせていただいております。環境学習をしていただく4年生の全児童さんにお送りしております。

(金谷委員)

各学校に配るのは難しいですか。やっぱりパンフレットより、絶対見たほうがいい。よくできていますよ。

(事務局)

別途、インターネットで見えるようにしてありますので、どなたでもさっきの映像は見ただけです。コピーはホームページからはできないですが、DVDが教育委員会があるので、すぐにコピーできます。

(高屋副委員長)

申し訳ないけど、教育委員会に送っただけじゃダメ。

(事務局)

今考えておりますのは、各市町さんで校長会などがあるので、そちらに行かせていただいて、ぜひ使っていただくようにPRはさせていただきたいというのは考えております。送るだけではなく。

(高屋副委員長)

本当に教育委員会に送っただけではダメです。

(岩崎委員)

総合学習で1時間一コマ、これで使えますよ。

(高屋副委員長)

本当にぜひ。やっぱり教育委員会に送っただけではダメですね。

(広瀬委員長)

じゃ、そのへんはどうやれば広がるか、せっかく作って利用されないんじゃないですか
らね。

(金谷委員)

もし改訂版を作るとしたら、今回のごみレポートに小学校があるでしょ。こういうのを
入れたらいいんですよ。こういうことをやっているというのがあったほうが。

(広瀬委員長)

じゃあ、そのへんの改善と、それから配布の仕方、普及の仕方をどうするか、皆さんの
意見を伺って。あと、パンフ等があるんですね。

(事務局)

資料5 パンフレット チラシ

県オリジナル携帯マイバッグ 説明

(広瀬委員長)

マイバッグはこの間も見せていただいたんですが、ものすごくいいんです。携帯に付け
てもいいぐらい。

いろんな物に付けて常時持ち歩けるので。

(岩崎委員)

製造原価はどれぐらいなんですか。

(事務局)

印刷込みで140円ぐらいです。

(金谷委員)

140円なら安いですよ。

(広瀬委員長)

これをぜひ付けて、宣伝して歩いていただきたいと思います。

これはカバンに付けてもそんなに変な感じじゃないですね。

この一つ前のバージョンを三重大で作られたんでしょ？

(事務局)

三重大のものはこれに「MOTTAINAI」が入りますので。これは向こうで売値が

320 円だったかな。

(高屋副委員長)

一緒のもの？

(事務局)

ほぼ同じ、形とかは一緒ですね。外装が若干違うみたいですが。生地は少しこちらのほうがしっかりしているかも分かりませんね。

あと、「もったいない」というのが商標登録みたいな形になっていて、そちらの団体へ寄付をするようになっています。

(広瀬委員長)

これならついすっかり忘れてしまうというわけにいかないですね。付けていけば。

「もったいない」は商標登録されているんですか。

(事務局)

商標登録がどうか確認をしないといけないと思うんですが、一応これを買った時には紙が入っていて、このロゴが入っていることによって、これに関して例えば 300 いくらだったら、そのうちの一部をその団体に寄付をしますというのが明記してありますので。そういう形で使われています。

(立田委員)

スーパーの前に『ゼロ吉』を置いてあるのを見ましたよ。だから各市町に置けば宣伝になるのでは。

(事務局)

マグネットステッカー（市町のごみ収集車に貼る） 説明

(広瀬委員長)

これも PR なんですね。

(事務局)

大きさが、横が 1 メートル、縦が 40 センチの非常に大きなものです。それをデーンと貼ってもらっていますので。

(岩崎委員)

だけど、60 台じゃ、滅多に会わないよね。会ったらよほどラッキーだな。

(金谷委員)

DVD に出ていたお母さんと女の子は三重県の人なんですか。

(事務局)

大阪です。

(金谷委員)

制作が大阪の会社だったんですか。

(事務局)

もともとは本社は松阪にあるんですが、このDVDのほうは大阪のほうに事務所があるということで。

(岩崎委員)

少し方言が出ているといいなと思ったんです。子どもが見る時にね。

(広瀬委員長)

他に何か。その他で何かありますか。

(事務局)

特にございません。

(広瀬委員長)

それでは、すみませんが、高屋さん、羽根さん、立田さんで、ごみゼロレポートの廃棄物会計のページ分かりやすくなるように詰めていただいて。で、もしそれ以外に気付いたことがありましたら、どうぞ事務局のほうにお願いします。

じゃ、次回は？

(事務局)

次回は来年の2月頃を予定しております。また調整させていただきたいと思いますので、その時にはまたよろしくお願いします。

(広瀬委員長)

じゃ、今日はこれで終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

(終)

閉会